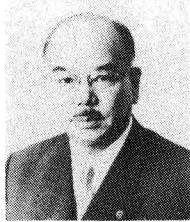


（姫路市助役）

明治33年8月、飾磨郡余部村（昭和29年姫路市に合併）に生まれる。大正7年姫路中学校を卒業、家業を手伝う。その後、代用教員、現場監督等を経たのち石見組を設立。昭和8年満州へ渡り石材を切り出したが失敗、一度引き揚げたものの捲土重来を期し渡満、満州石見林業㈱を興し成功するも、昭和18年戦況が不利になる

と決断よく帰国。先取気鋭の人であった。昭和21年最後の官選市長となり、翌22年4月市長に当選、以来5期20年間姫路市長を務めた。市長に就任するや卓越したリーダーシップのもと、「戦災復興は、各都市がバラバラで行動しては国土の復興は成し得ない」と全国戦災都市連盟を結成、自らが会長に就任し、中央と折衝、戦災復興に多大の功績を残した。姫路復興への取組みは、未来を見据えた都市づくりを目指して道路、公園、河川等の計画が大胆に進められた。なかでも話題となったのは姫路城～姫路駅間の大手前通りである。既存幅員わずか9米の駅前通りを50米に拡げ、架線を地下に埋設、無電柱化を図って城の美観を守り、万一の火災には防火帯ともな



る道路で、5年有余を経て昭和30年に完成をみた。

都市経営の理念は、独自の市営企業論をベースとしたもので、都市基盤整備を行いつつ、その事業費に整備後の売却益等を充当し、都市を望ましい姿を持って行こうとするもので、戦後いち早く興した市営バス事業、河川改修を目的とした宅地造成、市街地の小丘を活用した靈園整備、教育環境の整備を目途とした市立高校の移転等々、数多くの実績をみることができる。この他、早くから今日の都市交通問題を予測し、その布石として、姫路大博覧会をてこにモノレールを開通させた。また、大手前通りの次の整備ステップとして、オープンカット構想を打ち出している。これは50米道路の中央部を掘下げ、オープンカットし、交通の立体化、地下駐車場、遊歩道、地下街等を整備し、更には地下共同溝の確保を図る等、壮大な構想であった。今、大都市において地下活用が盛んに議論されていることを考えるとき、計画がいかに長期的視座にたっていたかが解る。

昭和42年4月、市長として6期に挑戦するも、多選批判の時代の流れを受けて敗北。時を同じくして東京では東都知事が美濃部亮吉に敗れ、戦後の復興に力をつくしてきた首長の時代が終わる。昭和51年1月75才で死去、今、自らが完成させた名古山靈苑の名誉市民墓地に眠る。